

## 京都の大正期の俳壇

——『鹿笛』と『京鹿子』——

河 野 仁 昭

### 俳句結社の先駆

近代京都における俳句結社の先駆は、一九〇四（明治三七）年二月に機関誌『懸葵』を創刊した満月会<sup>①</sup>（発足時の名称は京阪満月会）である。この会は一八九六（明治二九）年に、中川四明らが新聞『日本』の俳句欄に投句している京都・大阪在住の俳人たちに呼びかけて、毎月満月の夜集まって句会を催すことにしたのが始まりであった。いわば親睦会のようなもので、目的や会員について定めがあったわけではない。だから結社ではなかった。

『日本国語大辞典』（小学館）の「文壇」の説明に、「文学者の社会。文筆家の社会」とある。これに従えば京阪満月会は「俳壇」というべきものではあったといえる。

山口誓子は「ホトギスの人々とその主張」の中で、俳句結社について次のようにいう。

「之等高等警察法的な定義に従へば、『結社』とは、『共同の目的の為に、任意に結合した特定多数人の継続的団体』を謂ふのであるが、われわれが茲に問題にしようとするところの『結社』も亦、まさにかゝるものであって、唯其の連絡を雑誌によって計るところの結社を謂ふのである」<sup>②</sup>

京阪満月会は結社ではなかったといま書いたのは、大体のところこの誓子の定義に従ってである。ただ、この句会が始まったころの俳句界では、正岡子規が主唱する新しい俳句、いわゆる日本派俳句の賛同者はまだあまりいなかったから、同志的結合をはかるとともに、賛同者の増加を意図したのは確かである。長年『懸葵』の編集に当たった栗津水棹は、中川四明を次の

ように回想する。「翁」というのは四明である。

「翁は旧派の宗匠が鬱然と蟠居してゐる京都から独り敢然と起つて之れに賛し、日本に其の作句を送り忽ちにして其堂に上つたのであった。(中略)

明治廿九年頃子規居士の唱導した日本派の俳風は漸く各地に普及し、地方の新聞雑誌等にも俳句欄を設くるものが其の数を増して来たが、翁も亦日出新聞に拠つて関西一方の饒将として日本派俳句の鼓吹に努めたのである<sup>③</sup>」

四明が『日出新聞』俳句欄の選者を単独でつとめるようになるのは、一九〇一年からだが、一八九二年に入社した巖谷小波らと社内に文芸サロン種々会を興したところから、彼自身も作句を始め、旧派の記者仲間と投句欄に関与してはいたのだった。彼が単独で選に当たることになったのは、技量や知名度が高まったからであるとともに、日本派俳句の普及度をうかがわせることでもあった。

京阪満月会は発足の翌年、大阪満月会が独立したのだったが交流はつづけられ、四明を中心とする京都の満月会は一九〇〇(明治三三)年四月、大阪とも図つて句誌『種瓢』<sup>たねうす</sup>を創刊した。子規はこれを祝してエッセイ「俳句上の京と江戸」を送つてきた。

京都ではこのころ、満月会の若手が詩星会を結成したほか、

小規模ながら二、三の俳句会が動き始めるなど活況を呈しつつあったのだが、『種瓢』は創刊号のみで終った。

直接の理由は、四明に頼まれて編集の衝に当たった大釜菰堂が紀州へ移ったことであつたが、菰堂の後継者になるだけの人材がまだ育っていなかつたのである。発行母体の問題や財政上の問題もあつたかも知れない。

『懸葵』の創刊はそれから四年のちであつた。四明らには捲土重來の思ひがあつたはずである。「発刊の辞」は四明が書いている。

「吾等同人、力固<sup>もと</sup>より及ばざれども、故人の遺志を継ぎ今より奮励事に当たれば、斯道の研究に小補無しとは謂ふべからじ、唯だ希くは、大方の諸賢、吾等の微志の在る所に賛同せられて、再び俳連の此の京都に起り元祿の世、天明の春に次ぎ、更に明治の一新期を開く基をなさしめられんことを」<sup>④</sup>

「吾等同人」と明記していることに注意を引かれる。京阪満月会では見られなかったことばである。「故人の遺志」というのは、二年まえの一九〇二年に亡くなった正岡子規のそれである。誌名は葵祭にちなむものであり、四明は京都における俳句の興隆を強調している。

『懸葵』は満月会の機関誌だと冒頭に書いたのだが、看過すべくもないのは大谷句仏の存在である。句仏(本名・光演)は

一九〇一年から真宗大谷派（東本願寺）の副管長、一九〇八年から一九二五（大正一四）年まで第二十三世法主の座にあった。東京にいたとき彼は新聞『日本』で接した子規の俳論に共鳴し、子規が選者であった『日本』の俳句欄に投句していたのだった。

京都へ帰ったのは一九〇三年ころのようだが、彼は早速、俳句に興味を持つ寺内の人たちを集めて、句会下萌会を始めた。その中心メンバーの一人で大谷家の筆頭家従であった栗津水棹はいう。

「雑誌発行の議が再燃したのも是等の機運からであったが、翁を中心として瘦石、鱸江、木母、などに依って追々具体的に計画が進められ、余も亦下萌会を代表し上人（句仏）の旨を承けて其の挙に助力したのであった」<sup>(5)</sup>

句仏は京都に帰ってからしばらく、四明が選者であった『日出新聞』の俳句欄にも投句していたようであり、右の文章の中で水棹は、下萌会では「四明翁を初め京都俳壇の先輩なども招いて句作の研究」をおこなった、とも書いている。だから句仏と四明は交際があり、句誌の創刊について四明が相談を持ちかけたとしても不思議なかったのである。

『懸葵』の編集発行は創刊当初、遠藤瘦石宅であったが、五号から四明宅、そして創刊の翌年、第二巻一号から栗津水棹宅

になった。このとき『懸葵』は満月会から句仏の主宰に事実上移ったのである。これ以後、満月会が独自の動きを見せることはなかった。

句仏はかなり早くから河東碧梧桐の新傾向の俳句に共鳴していて、碧梧桐が同調者を増すための全国旅行には、四度にわたって旅費を援助するほど後援につとめていた。その句仏の感化は彼が主宰することになった『懸葵』に及ぶことになった。句仏の直接の影響はなくても、彼が主宰することになったころには、碧梧桐の新傾向俳句は俳壇の主流をなすに至っていたのだった。

同じ子規門下で碧梧桐と双壁といえた高浜虚子は、子規のもとに应じて『ホトトギス』の編集発行をつづけて来たのだったが、夏目漱石の『我輩は猫である』（一九〇五年）の成功以来、俳句よりはむしろ小説で購読者の関心をとらえる傾向にあった。このことは碧梧桐に厳しく批判されたのだったが、虚子は頓着することなく彼自身も小説家を志すようになっていた。小説家になることは中学時代からの夢でもあった。

虚子が徳富蘇峰が経営する国民新聞社に入社し、文芸部を設けてその主筆になるのは、『国民新聞』に連載した初めての新聞小説『俳諧師』正編（一九〇八年）が完結して好評を得た直後であった。彼は翌一九〇九（明治四二年）八月『ホトトギ

ス』の雑詠欄を廃止した。『国民新聞』の俳句欄の選も松根東洋城にゆだねていた。

雑詠欄は俳句を愛好する読者の投句欄であり、読者はこの欄によって句誌と結ばれているといってた。雑詠欄の選者がだれであるかはその句誌の評価にかかわることもあった。雑詠欄がなくなれば読者の多くが遠ざかるのは自然のなりゆきである。しかも『ホトトギス』は一九〇七年に漱石が朝日新聞社に入社して以来、他紙（誌）に執筆しなくなったことなどにより、小説の読者おも失うに至っていた。

虚子が国民新聞社を退職したのは、一九一〇（明治四三）年の秋であった。彼は『ホトトギス』に専従してその再建に着手したのである。子規の遺志をなおざりにするわけにはいかなかった。でもあったろうし、碧梧桐の新傾向俳句は俳句の伝統無視の方向に向かってもいた。

## 鹿笛句会の人たち

京都の書林文求堂で一八八五（明治一八）年に生まれた田中王城は後年、鹿笛句会を主宰することになるのだが、高浜虚子の直弟子であった。

彼は一九〇四年に早稲田大学商学部に入學し、在学中に虚子

の家に出入りして直接俳句の教えを受けるとともに、『ホトトギス』の編集や発送を手伝うなどした。

『鹿笛』二四一号（一九四〇年十一月号）は王城一周忌特集を組んでいて、これに収録されている鼎談の中で岩木躑躅<sup>6</sup>は、「王城君は松本翠涛翁（年尾注・鎌倉に住んで居られた方で連句を父などとした事がある。）からの紹介で来たのではなかったかと思ふ<sup>6</sup>」と、虚子に入門した経緯を語っている。文中に「年尾注」とあるのは高浜年尾で、王城没後、彼が『鹿笛』の編集発行を継いだことについては後述する。

躑躅は王城より少しまえ、一八九九年から三日にあげず虚子の家に通っていたと語っているのだが、王城と翠涛がどういう関係にあったかについては触れていない。

王城は上京まえの中学生時代に、『日出新聞』俳句欄の選者であった中川四明に俳句を学んでいたといわれている。投句していたのかも知れない。事実だとすれば、四明が虚子を訪ねるようアドバイスした可能性は多分にある。虚子は京阪満月会第一回句会に顔を出すなど、四明とは面識があった。子規の同門でもある。

早稲田を卒業して京都へ帰った王城は、中京区麩屋町通三条上ルに書画骨董店寸紅堂を創業した。それに忙殺されてでもあったろうが、句作は休止の状態にあった。彼が卒業したころ

には虚子は国民新聞社に入社するなど、『ホトトギス』にあまりかまけていらなかったことも、王城が俳句から遠ざかった理由の一つだったのは間違いない。

ほぼ毎年一度か二度京都を訪れていた虚子は、一九〇八年から六年間入洛することがなかった。再入洛は一九一四（大正三）年一月であった。<sup>(7)</sup>王城に再会して寸紅堂に一泊してもいるし、句仏、四明、水棹ら『懸葵』の幹部を歴訪している。長年の無沙汰の挨拶を兼ねて『ホトトギス』再建の心づもりを披露しておくためであつたろう。句仏や四明の地元京都にも手を伸ばすつもりでいたのである。

国民新聞社を退職してしばらくのち、病を得て休養した虚子は、恢復後ただちに『ホトトギス』の同人制を廃止して彼の単独経営誌とし、一九一三年には雑誌欄を復活して自らその選に当たっていたのだった。

### 春風や闘志いだきて丘に立つ

一九一三年一月に詠んだ虚子の句である。

彼は定型と季題を厳守し、俳句の伝統に立つことと、『ホトトギス』には俳句と小説を載せることの二つの基本方針を明示した。明らかに碧梧桐を意識してであった。

碧梧桐は定型と季題に束縛されない自由律俳句を目差すようになっていたのだったが、その傾向には句仏も同調できず、大須賀乙字を『懸葵』に迎え入れていた。乙字は大学時代に碧梧桐の影響を受けて俳句の世界に入ったのだったが、明治末期には俳句時評などで、碧梧桐が目差す新傾向俳句を手厳しく批判するようになっていたのだった。

この時期の『懸葵』について、一九一六年から水棹のあとをうけて編集者になる名和三幹竹は、次のように回想する。

「日本派俳壇にも幾多の動揺変遷があつたが、その著しいのは碧梧桐氏一派の新傾向運動が急に一転して十七字音の詩形を破り季題を無視するやうになった時代であつた。当時懸葵も少しく新傾向の波に乗ぜられ多少の動揺があつたが、同人の協力よくその難関をきりぬけ、現今俳句評の筆を本誌に載せてゐた大須賀乙字氏が、俳壇の進むべき道を直接間接に指導啓発せらるゝところあり、遂に碧梧桐氏一派とは進むべき道を異にして、専ら乙字氏の主唱する民族詩としての俳句の建設に努力し、乙字氏はその病没するまで懸葵のために論陣を張り全俳壇の進展のために倦むことがなかったのである」<sup>(8)</sup>

乙字が亡くなったのは一九二〇年、三十九歳であつた。彼が強調した伝統尊重、古典復帰を句仏はどう受け止めたか。彼が「我は我」の総題で『懸葵』に句の発表をつづけ始めるのは、

虚子が六年ぶりに京都を訪れた年の八月からであった。句仏はこれによって独自の俳風を作ったといつてよいだろう。

虚子の入洛は一九〇八年以前のように毎年のことになった。

その目的は明らかであった。京都をはじめ関西には、復活した『ホトトギス』雑誌欄の投句者が皆無にひとしかったのである。彼は王城ら古い門人を訪ね、規模の大小にかかわらず句会を持つなどした。『ホトトギス』への投句者を募ることが急務であった。

一九一五（大正四）年十月、京都を訪れた虚子は一ヵ月近く滞在したのだったが、着いてまもない十月六日、彼は兵庫県丹波竹田村の酒造家西山白雲を訪ね、常のことながら王城が同行した。先の『鹿笛』二四一号（王城一周忌記念号）の鼎談で、白雲の弟野村泊月は、「僕が王城君に逢ったのは虚子先生の御一行が丹波の白雲居を訪ねられた時だったか、京都から随行して来た王城君を、その時に知ったわけなのでした」と語っている。

泊雲は長男だったが家業を継ぐことを嫌い、何度か家出をしたり自殺を計ったことさえあった。上京して早稲田大学英文科に学んでいた泊月は、虚子のもとへ通って俳句の教えも受けていたので、兄を虚子のもとへ案内した。俳人になりたがっていたのかも知れない。泊雲が句作を始めるのはこの時、一九〇三

年ころからのようである。

泊雲が帰郷した年月は明らかになし得ないのだが、家族間の内紛もあって家は破産した。明治の終りころだと推定される。その後の泊雲について村山古郷はいう。

「虚子の俳句復活を聞いて『ホトトギス』に投句するようになり、一方、後援者の出資を得て、家運の再興を計った。泊雲は丹精籠めて醸造した新品を携えて上京し、虚子に命名を懇請した。虚子はこれに『小鼓』と命名し、家運挽回に生涯を賭ける泊雲に同情して、出来るだけの援助をしてやろうと思った。俳諧堂の小鼓販売は、こうした虚子の義侠心によって始められたものであった」<sup>9)</sup>

何にもとづく記述かはともかく、大体のところおそらくこういうことであつたらう。「俳諧堂」というのは『ホトトギス』発行所の副業として始めたものであった。小鼓の取り次ぎ販売開始は一九一五年六月で、この月の『ホトトギス』に大きくその広告が出され、虚子のもとに出入りする俳人たちにも好まれ、小鼓はヒットしたのだった。

虚子が王城を伴って泊雲宅を訪ねるのは、この年の十月である。招待されてのことだったろう。虚子は王城を泊雲や泊月に引き合わせておく心づもりもあったにちがいない。泊月は当時、大阪に私塾日英学館を創設して経営に当たるかたわら、

『ホトトギス』に投句を再開していた。この直弟子三人が協力し合えば、『ホトトギス』の関西進出の道は開けるはずである。虚子はおそらくそう読んでいたであろうし、事実そうだった。

王城が句作を再開するのは泊雲に出会ってからで、写生を泊雲の句から学んだ。三人はほどなく『ホトトギス』雑誌欄で頭角をあらわすようになり、共にその同人になり課題句などの選者をつとめるようになった。

王城が『ホトトギス』に投句するようになってまもなく、京都に俳句を志す人たちの新しい動きが見られるようになった。改造社版『続俳句講座』第八巻の中の『鹿笛』の項に、

「大正六年頃は京都にホトトギス系の俳句会が一つもなかったで、俳若葉会を起し、大正九年十月、夢仙、桐一、喜一郎、紅酔、碧城等相謀り鹿笛を創刊、翌大正十年より現在の王城氏を雑誌選者に薦し今日に到る<sup>(10)</sup>」

とある。同人の池尾ながしが書いたものであろう。俳若葉会の発足がいつかは定かでないが、『鹿笛』創刊の年かその前年のはずである。

一九二〇（大正九）年十月創刊の『鹿笛』編集発行者は池尾ながし（下京区御幸町通綾小路下ル）で、彼はその後長くそれをつとめた。雑誌選者に王城氏を「薦」すところから察し

て、王城は俳若葉会とまったく没交渉だったわけではなく、請われて初心者の指導などに当たっていたものと思われる。会はそういう人物を必要としたはずであり、京都に『ホトトギス』の投句者は王城のほかにはほとんどいない実情にもあった。雑誌選者になった彼は、実質的に主宰と指導の役割を負ったのであり、句会も俳若葉会ではなく鹿笛句会になったのであったろう。その鹿笛句会が、創刊号以降の雑誌欄から選んだ作品を主体に編集したアンソロジー『鹿笛第一句集』を刊行したのは、一九二四年十月であった。編者は田中常太郎（王城の本名）、発行は下京区の太田昌栄堂、売捌元は鹿笛句会（池尾ながし宅）である。

「今度鹿笛が創刊からすでに五年になるのでその記念に是非句集を出したい、それは同人だけの希望でない読者諸君の多数の希望だといふ事である。

記念する意味の句集、それなら出来ぬことはあるまい、兎に角、我等が五年の間歩むで来た道程を、その集によって顧みるといふ事は好個の記念であらう」

王城の「序」の一節である。池尾ながしが雑誌の句を季題別に清書して持参し、あとも追々持ってくるからといったとも書いていて、ながしの熱意をうかがわせる。

この句集に収録されている作品数は約二八〇〇首、作者の数

は四九〇名ほどで、少なくともその数の上では、鹿笛句会は関西有数の句会に成長していたといえる。作者は京都在住者だけでなく、かなり広範に各地方に広がっていることについては後でふれる。

収録されている作者は雑詠欄の投句者のほかに、協賛者もしくはゲストも含まれていて、その俳人と収録句数は、鈴鹿野風呂四十二首、野村泊月二十三首、相馬虚吼十三首、高浜虚子十二首、大橋桜坡子十二首、西山泊雲十首、原石鼎五首、村上鬼城五首、田村木国五首、日野草城四首などで、王城の交際範囲がうかがえる。この中に、同じ京都でありながら大谷句仏など『懸葵』同人の名が見られない（中川四明は一九一七年に亡くなっていた）。一線を画すところがあったものと思われる。虚子の意向だったかも知れない。作品が収録されている俳人はすべて『ホトトギス』系である。

句集出版時の同人または同人と推定される作者とその収録作品数は、武田夢仙八十二首、田中王城七十六首、菱田喜一郎五十八首、近藤不彩五十七首、宮崎桐一四十首、松田芒趾三十九首、佐々木紅醉三十八首、池尾ながし三十三首、田中紅朗二十八首で、全作品の約二割を占めている。明らかにこの人たちが鹿笛句会の中核であった。

収録作品の中で比較的多いのが、庶民生活の現場を詠んだ句

である。

畦割って雪解の水を落しけり 味乗  
隣り田と通へる水の温みけり 喜一郎  
田搔馬畦に大波うたせけり 絶海  
張物に早かげらへる冬日かな 玉女  
店火鉢に大荷下ろして寄りにけり 洛幢

乗馬往診

冬木寺馬を繋ぎて借り廁 一仏

四季を問わずこうした句がほとんど各ページに目にとまる。これが鹿笛句会の特質をなしているといってよいだろう。庶民あるいは市井の句会であったといえる。王城自身がその一人であった。句集に収録されている彼の句は、

春水のこゝにも溢れ道辺草

打ちそりて煙り上げる目刺かな

鹿の糞小春の草に続きけり

といったもので、全体としておだやかで整った写生句が多い。『鹿笛句集』は第一句集としており、句会もさほど変動なくつづいたのだから、第二句集とその後が出版されたはずだが、目下のところ未発見である。

第一句集から五年後、一九二九（昭和四）年十一月号（第十卷十一号）は、編集発行がやはり池尾恒太郎（ながし）、雑詠



選者は田中王城である。この号に名を連ねている同人は、草場黙々、吉川雅喬、山中草兵衛、家生圭州、松田芒趾、金谷柳青、森桂樹楼、田中紅朗、嘉藤成外（成街）、内藤十夜、池尾ながし、近藤不彩、宮咲（宮崎）桐一、小口琅玕子、菱田喜一郎、安田源二郎、貞永金市、武田夢仙、繁本砒石、土江草徑、藤原夜野火、北原常悦、中尾夢六郎、柳原静々居、西村凌霄花、穂北燦々、五十川湖石、藤田草園、の二十八名。王城は雑詠選者として別格の扱いになっている。

ちなみに、先に見た『続俳句講座』第八巻の『鹿笛』の項には、「幹部（同人の中の一部）」として、次の十二名をあげている。

藤田耕雪、高崎雨城、石橋雄月、森桂樹楼、宮崎桐一、金谷柳青、白井冬青、池田兎月、近藤不彩、安田源二郎、田中紅朗、松田芒趾。

耕雪、雨城、雄月、冬青、兎月らは、一九二九年以降に同人に加わったのであろうが、耕雪は『鹿笛第一句集』に八十首収録されており、妻の春梢女は九十九首収録されている。これは全作者中第一位の句数であり、耕雪は第三位であった。右の『鹿笛』第十卷十一号では、夫婦の作品が一ページ取りの特別な組み方になっている。大阪の実業家であった耕雪とその妻は、資金援助などによる特別会員だったのかも知れない。

『鹿笛』のこの号の雑詠欄に一句以上掲載されている投句者は二八三名にのぼっている。投句者数を地域別に見ると、京都（府下を含む）七十二名、滋賀二十一名、愛知十五名、愛媛松山十一名、大阪八名（以下略）といった順である。大阪をはじめ兵庫、和歌山などが少ないのは、一九二二年十二月に野村泊月が大阪で『山茶花』を創刊し主宰した関係によることではないかと思われる。泊月も京都では「俳人諸君に対して故意に無関心な態度をとってゐました」と語っている<sup>(12)</sup>。

『鹿笛』誌上の「地方句会予告」や「地方会報」などによると、王城はかなり足まめに地方へ出かけている。先の『続俳句講座』第八巻には、『鹿笛』の「特色・目標並びに主張」について、「本誌は唯理屈ぬきで一途に句作邁進を目標とし、初歩の人の誘導を特色としてゐる<sup>(13)</sup>」と書かれていて、これが王城その人の姿勢であった。彼は人に慕われたと先の「鼎談」で泊月は語っている。

一九三九（昭和一四）年十月二十六日、田中王城は五十四歳で病没した。そのあとを高浜年尾が継ぎ、編集発行所は芦屋市芦屋字徳塚の年尾方に移った。虚子の意向によることと見て誤りなからう。それから四年半ほどのちの一九四四年四月、『鹿笛』は雑誌統合令により、同じ京都の『京鹿子』と合併して誌名も『比枝』と改め、やはり年尾が編集発行者になったのだっ

だが、二ヵ月後に物資不足のため休刊のやむなきに至った。王城一周忌時点での会員数は一八七名であった。

戦後の一九四八年一月、『京鹿子』は復刊したが、『鹿笛』の復刊を見ることはなかった。やはり田中王城あつての『鹿笛』であつたといわねばなるまい。

## 京大三高俳句会と『京鹿子』

句誌『京鹿子』の創刊は、『鹿笛』創刊の翌月、一九二〇（大正九）年十一月、同じ『ホトトギス』系であつた。

編集兼発行者は日野草城で、彼は第三高等学校の生徒だつたから、三高内日野草城を編集発行所所在地とした。といつても『京鹿子』は彼の個人誌ではなく、創刊時から同人制をとつていた。創刊同人は、岩田紫雲郎、田中王城、鈴鹿野風呂、高浜赤柿、中西其十、そして草城の六名。このうち、紫雲郎は三井銀行京都支店の銀行員、野風呂は武道専門学校の教授、王城については先に見たように骨董商寸紅堂の主で、他の三人が三高生であつた。社会人と生徒を同教にしたのは偶然ではなかつたかも知れない。

草城は一九〇一（明治三四）年東京生まれだが、父親の勤務の関係で朝鮮で育ち、日本での生活は一九一八（大正七）年九

月に三高に入学してからである。しかし、京城中学時代から文学を好み、小説、短歌、俳句などを書いて東京の雑誌に投稿し、『ホトトギス』の雑誌欄に入選したことさえあつた。

入学早々、草城は『懸葵』の編集者で雑誌選者でもあつた名和三幹竹を訪ねて句稿を見てもらった。京都には『懸葵』以外に句誌らしい句誌がなかつたのである。

それから一ヵ月ほどのちの十月、郷里の松山で兄の三回忌法要をすませて東京へ帰る途中の高浜虚子が、京都に数日滞在した。虚子歓迎句会が催されているからその席においてだろうが、草城は三幹竹によって虚子に紹介されたのであつた。<sup>14</sup>三幹竹は草城の句稿を見てその才能に気付いていたのだらう。

おそらく同じ席においてであろうが、虚子は草城を王城に紹介した。『ホトトギス』の雑誌欄に入選を重ねている俳人は、京都にはまだ王城くらいしかなかったはずである。草城はその後、寸紅堂に王城を訪ねるようになった。

草城が赤柿や其十らと神陵俳句会を始めたのはその翌年、一九一九年の夏であり、その夏休み明けに彼は、紫雲郎を紹介する虚子のはがきを受けとつた。虚子は京都支店に転勤することになった紫雲郎にも、草城を紹介するはがきを送つていた。<sup>15</sup>

紫雲郎は福岡支店に在職中、吉岡禅寺洞に俳句を学び、禅寺洞が『天の川』を一九一八年七月に創刊して以来、その同人と

して句作をつづけていたのだった。

京都支店勤務になった紫雲郎は清水坂に住み、草城らはほぼ定期的に紫雲郎を囲んでこの家で句会を持つようになった。その句会と神陵俳句会が軌道に乗った一九二〇年二月、神陵俳句会は京都大学の同好者にも呼びかけて句会の枠を広げ、京大三高俳句会とした。この月の二十二日に京都美術倶楽部で俳句大会が開催され、出席した虚子を翌二月二十三日に招いて京大三高俳句大会を開いた。会場は京大学生集会室であった。これが京大三高俳句会発足の日と見てよいだろう。

一八八七（明治二四）年に吉田神社の神官の家に生まれた鈴鹿野風呂が、武道専門学校の国語教師として鹿児島から帰ってくるのは、右の発会から二ヵ月後の四月であった。

野風呂は京都大学国文科に在学中、藤井乙男から古俳諧を学んだ。近世文学が専門の藤井は、東京大学の学生時代に正岡子規と交わり、新聞『日本』に投句を始めた俳人でもあった。号を紫影といった。野風呂は藤井から、俳諧の研究には実作の経験も必要だと教えられて句作を試みたもののあまり興味が持たず、卒業論文は「古今集の研究」であった。

彼が本格的に句作を始めるのは、鹿児島県川内中学校の教諭時代で、佐藤放也という俳句に熱心な同僚の感化によってである。一度だけだが『ホトトギス』の雑誌欄に入選するまでに

なっていた。武道専門学校の教師になってからも、生徒有志を集めて課外に俳句会をつづけるほど俳句に熱中し、文学研究志向から俳句の実作者に転じた。

京都へ帰った一九二〇年の九月ころ、野風呂は草城を食事招き、同席していた川内中学での教え子で三高に入学した長坂二葉を引き合わせている。二葉は京大三高俳句会に入会しているからそのための紹介だったろうが、そういうことをするくらいだから、野風呂はそのまえから草城と、ひいては京大三高俳句会と接触していたにちがいない。

野風呂が同人の一人になる『京鹿子』の創刊は、すでに見たようにこの年、一九二〇年十一月である。

伊丹啓子の『日野草城伝』によると、草城は食事を共にしたころから野風呂宅をしばしば訪ね、野風呂夫人からも目をかけられるようになったという。神麓居と名付けた野風呂の家は上京区（一九二九年に分区して左京区となる）吉田中大路町だったから、三高の東隣りといってよかった。

そのころ、王城は『鹿笛』の創刊を控えていたから他誌どころではなかったであろうし、銀行支店のおそらく管理職だったと思われる紫雲郎は多忙だったにちがいない。そうでなかったにしてもわざわざ清水坂まで出かけなくても、草城は東隣りの野風呂の意見や助言を聞いて句誌創刊の準備を進めればいいこ

とであった。王城や紫雲郎の意見は野風呂にとりまとめてもらえばいいことである。

野風呂はもちろん草城も、『鹿笛』の創刊が目前に迫っていることは承知していたであろうし、それが刺激にもなったろう。王城に了解を求めもしたにちがいない。草城らの願望は京大三高俳句会には機関誌がなかったからそれを持つことにあった。しかし、少人数である上に若い未経験者ばかりだったから、かねてから指導と助言を得て来た紫雲郎ら三人の社会人にも加わってもらうことにしたのだらうと思う。その点では野風呂や紫雲郎らは同じ同人というものの顧問格であった。野風呂らにしてみれば、市井人が主体になりそうな『鹿笛』はあっても、学生生徒は自治自立を好んだし、彼らが育つためにも独自の機関誌があつていい、むしろあつたほうがいいという思いがあつたのではないか。

そうはいっても同じ『ホトトギス』系の僚友誌として、無用の競合を避け、協力関係を保つ必要性はあつた。その点、王城の役割は大きかったであらうし、鹿笛句会の有力な同人であった武田夢仙や今井涙紅らは、『京鹿子』創刊の翌年から京大三高俳句会の例会に出るようになった。この会は京大三高の学生生徒に会員を限定していなかったのである。一方、野風呂は元来多産家だったからでもあらうが、『鹿笛』に積極的に寄稿を

つづけたのだった。両誌は嵯峨野で合同句会を催しもした。

『京鹿子』は主宰者を置かず、創刊当初は雑詠欄の選も同人全員が分担した。大正デモクラシーの影響といえなくはあるまい。『鹿笛』との大きな相違点の一つである。雑詠選はやがて野風呂と草城の隔月選となり、さらに五十嵐播水を加わえて三人の別選となった。

京大医学部の学生であつた播水の加入は二号からであり、十号から三高生の山口誓子加わった。ただ、誓子はほどなく東大法学部に進学して水原秋桜子らと東大俳句会を復活することになるので、同人の期間は長くなかった。

武道専門学校での野風呂の教え子、西沢十七星、村田伊勢寺、若林美入野らが京大三高俳句会に加わるのは『京鹿子』創刊の二年後からで、この会の月例会の出席者は二十名を超えた。京大三高俳句会の最盛期であり、彼らは『京鹿子』の同人もしくは投句者であつたし、句会の模様は創刊以来『京鹿子』に掲載された。

社会人である俳人の野村泊月や水野白川らが『京鹿子』の同人になるのは、一九二二年だから十七星らとほぼ同じ時期である。白川は洛東岡崎の大邸宅白川荘の主人だったから、入会後しばしば『京鹿子』の句会や忘年会などの会場に当てられた。

白川らが入会した年の十一月、京大三高俳句会は京鹿子句会

と名を改めた。実質は解散であった。みな同人なり投句者として『京鹿子』とかかわりを持っていたし、京大三高の学生生徒以外の会員が増加した現状にあっては、改名が解散にほかならぬことであつたとしても、さほど深刻な問題ではなかったと思われる。競い合つて精進すればいいことなのだ。だが、それから三年後の一九二五年五月、京大三高俳句会は復活したのである。

草城はその前年三月に京大法学部を卒業して大阪海上火災保険株式会社へ入社し、大阪に住むようになっていた。播水も一九二三年に京大医学部を卒業して医師の道を歩みはじめていた。

復活の中心になつたのは、やがて『京大俳句』を始めることになる井上白文地らであつた。彼らは草城や播水が退いたあとの野風呂らの『京鹿子』の指導方針や取り仕切り方に疑念を抱くようになっていたのかも知れない。紫雲郎は一九二二年に東京へ転勤になつていた。

鈴鹿野風呂の選・編集によるアンソロジー『京鹿子第一句集』が水野武（白川）によって出版されたのは、一九二五（大正一四）年七月であつた。創刊号から五十号（一九二四年二月号）までの『京鹿子』の雑誌欄、課題句欄、諸家近詠欄その他から選んだ約二〇〇〇句（三一四名）を収録したもので、草

城が序文を書いている。巻末に野風呂の名による「編輯を終へて」<sup>(16)</sup>が付されていて、その全七項の中に次のような項目がある。

「一、本集は編集に當りて在京同人、並に大阪より日野草城氏、福知山より西沢十七星氏等馳せ参じて努力せられし労を謝す。

一、本集出版に就ては、水野白川氏専ら交渉の任にあたられ、誌友内外出版会社取締役野田菱雨氏、その間にありて尽力せられたり。茲に記して両氏の労を謝す」

「在京同人」というのはどういう顔ぶれか明らかでないが、創刊時からの経緯からすれば、草城や播水つまり学生生徒の同人が参画して当然である。しかし「編輯を終へて」にはそれをうかがわせる記述が見られない。西沢十七星は武道専門学校の卒業生であり、序文を寄せた大阪住まいの草城は、編・編集に直接には関与したとは思えない。「編輯を終へて」の日付は「大正十四年四月」、京大三高俳句会復活の一ヵ月前である。だからその名が記されていなくて不思議ないのだが、彼らは選・編集には関与しなかつたと見てよさそうに思える。野風呂を中心とする社会人によって事は進められたにちがひなからう。それはともかく、句集に収録されている作品数を作者別に見ると、第一位が選者野風呂の一八八首、二位が草城一三五首。これにつづくのが野風呂の川内中学時代の同僚であつた佐藤放

也の七十九首、播水七十五首、十七星四十一首、王城四十首、白川三十五首、伊勢寺、紅醉、紫雲郎、水原秋桜子が各三十四首といった順である。

これに対して京大三高俳句会系の人たちは草城、播水を別格として、図羅三十二首、誓子二十七首、井上北人二十六首、凡平二十五首、爽雨二十一首、他は二十首以下だから作品数の上では目立つ存在ではない。このうち北人は、草城（創刊号—四十二号）、播水（四十三号—五十四号）のあとをうけて、五十五号から『京鹿子』の編集者であった。

やがて『京大俳句』の創刊にかかわることになる人は、この北人と、一首だけ収録されている白文地だけである。他の人は入学していなかったか、まだ俳句を詠んでいない、あるいは『京鹿子』に投句していたかったのだろう。

『京鹿子句集』はその後、第二句集（草城選・編集）、第三句集（野風呂選・編集）と着実に刊行され、第四集が草城の選・編集で一九三三（昭和八）年九月に京鹿子発行所から出版された。これには『京鹿子』一一一号（一九三〇年一月号）から一四四号（一九三二年一〇月号）までに掲載された作品から選ばれた約九六〇首が収録されており、作者数は三六七名である。第一句集より五十名ほど多い。投句者の増加によることであろう。逆に作品数が第一句集の半分以上になっているのは、

草城の厳選の結果にはかなるまい。その選・編集は野風呂とまったく対照的である。

作者別に収録作品数を見ると、最も多い野風呂で二十八首、つづいて苦茗二十七首、砧女二十六首、草城二十五首、静歩、水香が共に二十二首、黒潮二十一首、他は二十首以下で分散している。第一句集で上位にあった人では、十七星十首、伊勢寺四首、紅醉三首、紫雲郎一首で、誓子、秋桜子、王城、放也、白川などは一首も見られない。

『京大俳句』に参加する人では、長谷川素逝十首、平畑静塔六首、野平椎霞五首、中村三山四首、清水九十九が二首、福本流枕一首で、彼らが新しく『京鹿子』に投句するようになっていたことが分かる。収録作品数は少ないとはいいがたい。ただ、それ以前からの人は、白文地二首、北人一首くらいである。

この第四句集刊行の前年、一九三二年に『京鹿子』は創刊以来の激動を経ている。この年の三月に草城は第二句集『青芝』を京鹿子発行所から出版したのだったが、その夏、吉田山の東洋花壇で出版記念会が催された席で、草城は『京鹿子』の同人制廃止、野風呂の単独主宰としたい旨の意志表明をおこなったのである。草城は大阪に住んでいたから、それもあったかも知れないが、彼がそう決断せざるを得ないまでに『京鹿子』は収拾困難な状態に陥っていたのはおそらく確かであろう。彼自身

もすでに転進を図りつつあった。京大三高俳句会の動向もさることながら、『ホトトギス』系そのものが変動期に入っていたのだった。

その発端は、『ホトトギス』の最も注目されていた俳人の一人であり担い手であった水原秋桜子が、一九三一年十月、主宰誌『馬酔木』に「自然の真と文芸上の真」を発表して『ホトトギス』と決別し、主宰誌をこの号から独立させたことにあった。問題は虚子が、俳句は「花鳥風月を諷詠するにあり」と指導理念を鮮明に打ち出した一九二七年六月に溯るだろう。いま詳述するいとまはないが、秋桜子は客観写生をもって満足すべくもなくなっていたのである。『ホトトギス』から自由になったことにより、自身の俳句観と実作をだれにはばかることなく発表し得ることになった。そのことによって『馬酔木』の購読者・投句者は急増したのである。

草城にとって秋桜子は京大三高俳句会以来の盟友であった。彼自身は『ホトトギス』を去る意志はなかったが（誓しも当時はそのようであった）、秋桜子に連動するものを心に持っていたのは確かである。事実、草城は、秋桜子と同様、伝統より詩性を重視する方向で新しい俳句への歩みを開始していたのだった。若い学生生徒たちが、そうした秋桜子や草城らの動向に無関心だったはずがない。新しい動きに敏感に反応し実践を試みるの

は若者の特権である。

『京鹿子』の同人制廃止と野風呂の単独主宰を草城が表明したのは、おそらくそうした実状にもとづくことであった。「それは、ひとつには野風呂に対する友情からでもあった」という伊丹啓子の指摘はおそらく正しい。二人の親交はその後もつづいている。

野風呂の日記、一九三二年九月二十五日の項に、次の記述がある（文中のバーレン内は引用者）。

「（午後）七時から長男勝を連れて京鹿子九月例会に赴く。（藤岡）玉骨夫妻も態々参会。珍しく北人も来られ、久しぶりの名披露をせられたのは嬉しかった。総数二十七名、披露前に、私が同人解散、個人経営になったことを簡略に話し、今後の援助を乞ふたら、一水・八桂の慇懃なる御挨拶があった」<sup>(18)</sup>

このときが同人制廃止の日であり、北人が披露したのは十月号で（草城が句集の対象にしたのはこの号まで）、翌月の十一月号（一四五号）から野風呂の単独主宰になっており、雑誌欄は「神麓集」と名付け、選者は野風呂のみである。それまで編集者であった北人に関する右の記述も興味ぶかい。これが当時の『京鹿子』の実状だったろう。

第一句集の「序」に、「京鹿子とは、大正九年の冬の誕生以来大正十三年の春まで、私がてしほにかけて育て、きたひとり

娘の名前である」<sup>(19)</sup>と書いた草城は、第四句集の「編輯者の言葉」に、

「本集は、京鹿子の選者としての僕の最後の作品である。本集一卷を贈り、僕は諸君に別を告げる。僕は事務を完了した清算人の満足に似たものを覚ゆる」<sup>(20)</sup>

と書いている。「清算人」に心情をなぞらえたくなるほど、それまでの彼の立場は重く複雑だったことが察せられる。

『京大俳句』の創刊は『京鹿子』が野風呂の主宰になった翌年、『京鹿子第四句集』が刊行される一九三三年の一月であった。中心になったのは、井上白文地、中村三山、平畑静塔、藤後左右、長谷川素逝、野平椎霞、瀬戸口鹿影らで、ほとんどが『京鹿子』で育ち、同人制廃止の際に退会した人たちである。主たる目的は俳句研究で、特定の主宰者は置かず、編集および雑誌選は会員が交代で当たることにしたのだった。

主宰者は置かなかったが顧問は置いた。創刊時のそれは、鈴鹿野風呂、日野草城、五十嵐播水、山口誓子、水原秋桜子の五名、「俳壇の呉越同舟の指導陣」<sup>(21)</sup>だと田島和生は評している。野風呂はもちろん播水も虚子の花鳥諷詠を重んじた俳人であった。創刊時にはそういう俳人を支持する会員もいたかも知れないし、会員層の広がりを持望してであったかも知れない。だが、数年をも経ることなく『京大俳句』は最も急進的な新興俳

句集団となり、顧問はもちろん素逝その他数名の会員が去って行った。

野風呂の個人誌になった『京鹿子』について、彼の手によってだろうが『続俳句講座』第八巻に、「野風呂の個人雑誌の如きもの故幹部といふほどのものなし」とあり、さらに、かつては「京大出身者を中心として」同人が四十余名いたが、解散してのちそれに代る「賛助八十名あり」<sup>(22)</sup>と書かれている。「賛助」というのは会員のようなかであらうか。他の項目には「援助の重なるもの」おそらく支援者の意味であらうが「賛助」と別の人たちではなさそうで、その名前をあげているのは、日野草城、五十嵐播水、松尾いはほ、水野白川、高倉観崖、石井桐蔭、高崎雨城、長谷川素逝、福村青纓、谷口八重、渡辺こうみ、川端柳生、西沢十七星、若林美入野の十四名である。スペースの関係があるから他は省略されているかも知れない。草城や播水に関するかぎり客員といったところだったように思われる。作品をあまり寄せている様子はない。

「目標並に主張」の項には、「俳諧の大道を歩み、党同伐異を好まず、楽しき俳諧国を作りたし」と書かれている。田中王城のもとで坦々と歩んできた『鹿笛』と対照的に、議論と波乱を経た『京鹿子』ならではの目標だといえそうである。



注

- (1) 河野仁昭『京都の明治文学』白川書院 二〇〇七年 六三一  
七七頁参照
- (2) 山本三生編『俳句講座』第八卷 改造社 一九三二年 七頁
- (3) 粟津水棹「中川四明の追憶」(『俳句講座』第八卷 改造社  
一九三二年 所収) 三四頁
- (4) 清水貞夫『俳人四明覚書』私家版 一九九二年 五一―五二  
頁
- (5) 粟津水棹 前掲書 三五六頁
- (6) 岩木躑躅・野村泊月・高浜年尾「躑躅、泊月に聴く鼎座談」  
『鹿笛』二四一号 一九四〇年 二四頁
- (7) 高浜虚子の京都とのかかわりについては、西村和子『虚子の  
京都』角川書店、二〇〇四年を参考にしたところが多い。
- (8) 名和三幹竹「懸葵の人々とその主張」(前掲『俳句講座』第八  
巻) 二八―二九頁
- (9) 村山古郷『大正俳壇史』角川書店 一九八六年(六版) 六六  
頁
- (10) 山本三生編『続俳句講座』第八巻 改造社 一九三四年  
二二六頁
- (11) 田中常太郎編『鹿笛第一句集』太田昌栄堂 一九二四年 一

一二頁

- (12) 前掲「躑躅、泊月に聴く鼎座談」二六頁
  - (13) 前掲『続俳句講座』第八巻 二二六頁
  - (14) 伊丹啓子『日野草城伝』沖積社 二〇〇〇年 四二頁。草城  
に関して参考にしたところが多い。
  - (15) 伊丹啓子 同右 四三頁
  - (16) 鈴鹿野風呂編『京鹿子第一句集』水野武 一九二五年 別頁  
一一二頁
  - (17) 伊丹啓子 前掲書 一三三頁
  - (18) 鈴鹿野風呂『俳諧日誌』巻一 京鹿子文庫 一九六三年  
一〇頁
  - (19) 前掲『京鹿子第一句集』一頁
  - (20) 日野克修編『京鹿子第四句集』京鹿子発行所 一九三三年  
一頁、克修は草城の本名。
  - (21) 田島和生『新興俳人の群像―「京大俳句」の光と影』思文閣  
出版 二〇〇五年 二四頁
  - (22) 前掲『続俳句講座』第八巻 二二二―二三三頁
- (コウノ ヒトアキ ゲストスピーカー)